

かつて、私の脚にじゃれついていた犬がおりました。前脚が一つ欠損した彼はグスタフといいまして、それは私の付けてやった名でございます。かつて私は、憂鬱な溜息を浮かべる都度その名を呼んでおりました。私の父は色欲の大罪を司る大悪魔で、人間たちは憎悪と畏怖の念を籠めて彼をアスモデウスと呼んでおりました。

ところで、犬をグスタフと呼ぶ私の名は、イザベラと申します。しかしながら、私をイザベラと呼ぶ者は、犬一匹として存在しませんでした。グスタフがいてくれなければ私はひとりであって、故に、イザベラという名を呼ぶ者は私自身の他には誰一人としていません。それは私にとって、そこらを這いつくばる蟲の名前を私が知らないのと同じでした。つまり、懐く犬には名前を与えもするし、気に留めるにも値しない蟲を知らぬうちに踏み殺してしまっても、罪悪感などは抱かない。そういう認識でおりました。蟲の名前など知りたいなどという考えは、決して抱いてはいなかったのですから「私の名はイザベラです」と名乗っ

すまなそうに淋しそうに私を見上げる犬の眼に近しいものがあつたのです。

私は、名前を呼ぶことしか犬を可愛がる術を知りませんでした。けれど、知らないながらも上手いやり方を探してみたのです。

屈んだまま、膝にひやりとした、ねとりとした気味の悪い感触を覚えるまで、グスタフに対して一切の行動を起こさずにおりました。ですが、舌先が膝をぐると舐めずつたところで、やはり私のほうが気分を害するのを抑えきることはできません。

「ねえ。どうして、こんなにも、莫迦なの」
撫でるようにそつと黒い首筋に触れて、次の瞬間には、今度は蟲を振り払うのと同じ色の眼で、平気で突き飛ばしました。こんなことばかりを繰り返す日常を経てもお、グスタフが私に懐くという事実は、私には決して理解のしようもないことでありましたから、そうして思考が行き止まって、莫迦だ、と茫漠と呟いてばかりおりました。

無知は罪だ。
無知な私にも、それだけはわかりました。

たことはグスタフ相手の外には、ただの一度もなかったのです。

とある日、膝の裏を鼻先で舐められた私は、そつと屈んで視線の高さを犬と同じにしました。稜線に半分埋もれた黒い夕陽が網膜をそろりと焼いて、眼の奥につんとした痛みが燻る時分でございました。

「グスタフ、やめなさい。くすぐったいのよ」
そうした前置きの吐息がグスタフの鼻先をくすぐると、その鼻が今度は私の赤い長い髪をさら、と弄んで、すると続けざま、片方だけの前脚は私の膝を踏み台にして、耳の上から生えた翼を甘く噛み始めます。

理由はわからぬのですけれど、そうして彼にじゃれつかれることが、私はどうにもむず痒くていられなかったのです。そして私はグスタフの頸筋を絞めて、そのまま突き飛ばしてしまいます。

「やめると言ったの。わからないの？」
グスタフは無い脚で、ドーベルマンのおおよそ成犬分の体重を支えようとします。その脚は当然空を切りました。砂利に叩きつけられてぎゃん、と悲鳴にも近い鳴き声が上がります。その様子を見下す私の眼は、

自らの世界の中央を可愛がる方法も知らないでいられるほど、私は大悪魔の娘ではいられませんでしたが。しかし、愛情という言葉はどこかで聞いたことがあつて、結局、聞いたことがあるだけで。

瞳を焦がした太陽は空際に余韻を残すばかりになつたので、傍でじつと舌を垂れる彼に視線を遣ります。艶を失った毛は落ちゆく夜と同じ色をしておりまして、幾つも見られる傷痕と眼の色ばかりが闇を裂いておられます。痛々しいものでしたが、私に懐いてくれた証でもあるのですから、当時の私には、それは彫像よりも宝石よりも美しいものに思えておりました。その大きなルビーに、硝子玉より空虚な私の瞳をじつと見つめられてしまえば、じつと見つめ返す外にはありません。この時、私は酷く虚ろでありましたから、先に眼を反らすのは、やはり私の方です。心を満たす物が無いので、浅い底を見透かされるような気がして、居ても立ってもいらなくなつたのです。

私は一步、二歩、後ずさりするように立ち上がり、すると面を上げたグスタフは開いた幅を詰めて、またじつと見つめてきます。彼を見つめ返してやれないま

まに三、四と後ずさり。五歩目でグスタフはうろたえて脚を止めてしまいます。六歩、七歩、そこでとうとう背を向けて、八、九、十歩と加速して、そこからはもうどれだけ走ったのか、皆目わからなくなりました。グスタフは私の後を追ってこなかったということだけはわかっていて、だというのに息を切らせて、ともすれば心臓が、熟れ過ぎたトマトのようにぐずりと崩れてしまうほどに走って、振り切って、私は逃げていたのです。——何から逃げていたのか、その時の私には考えることすらできませんでした。

何かを振り切った私の目の前には、大層立派で豪華な屋敷が広がっておりました。虚ろに導かれるまま辿り着いたのか望んで訪れたのか、仔細はとうに忘れてしまいましたけれど、とにかくそこはアスマデウスを取り仕切る巨大な娯楽場であり、彼の棲み処でありました。けれども、私の家ではないのです。アスマデウスは父であります、それ以前に純粹なる悪魔でございます。どこで儲けたかも知れない自分の娘には、イザベラという名前を投げ遣りに与えるだけで、それきりでしたから。

スの面持ちに対し、そう感じたことは今でもハッキリ記憶しております。

彼は自身の赤い顎髭を摘みながら、小首を傾げて視線で舐めまわして私を評定し始めました。口端から零れる笑みは黄金よりもギトギトとしていて、おおよそグスタフの表情ばかりしか知らない私は、薄気味悪さで胸がいっぱいになってゆきました。それがどれだけ続いたのかは覚えてはおりませんが、酷く長い時間かと思えていたのです。あわや私の感情が臨界点に至ろうとした、まさに寸でのところですよやく「娘」という、父の低くぐもった声を耳にしました。途端に心がひっくり返ってしまいます。だって、どうせ父は私の顔も名前も、存在さえも覚えてなどいないのだ、という確信めいた推察を、私はずっと抱いていたのですから。しかしながら、この赤い髪は父譲りですから、父はきっと私が娘であると認めたのだ、と私は察したのです。ありのままにその時の私の感情を申し上げますと、アルコールの熱い眩めきよりも、阿片のもたらす甘美な多幸感よりも、遥かに強い昂揚を感じておりました。

私ははたと顔を上げて息を大きく吸い込んで、決意をひとつばかりいたしました。

開いた扉よりもずっと重く押し黙ったままに、屋敷をひとり往きました。カードや賽の目の如何であちらこちらから飛び交う怒号と、耳にこびり付く甘ったるい嬌声と、ばかにきついアルコールと阿片の白い香り。悪魔染みだ下卑た享楽ばかりが満ちた、その最果てに私は訪れたのです。ギトギトとした黄金のドアノックを掴み、二度ほど叩き付けて、ドアを開け放ちました。ノックの返事なんて待ちませんでした。

だって広い部屋の内奥で、とす黒い気配を持つ悪魔はその時、椅子に深く深く凭れて微睡んでおりました。私の起こした物音で丁度眠りから覚めたよう、大仰な欠伸をかいて、やがてぎよるぎよるとした黒目がこちらへ向きます。それは例えば天使が精製した聖水を注いでどこまで希釈したとしても、グスタフのそれは決して似つかぬ、おどろおどろしい沼そのものでした。とす黒い悪魔の、一番にとす黒い悪魔であるのは瞳なのだろうか。と、久方ぶりに拝観したアスマデウス

ああ。申し訳ありません。私が何故この部屋を訪れたのか、その理由を未だお話ししてはおりませんね。

完結に言ってしまうえば、愛情とは果たしてどのようなものであるのかと、教を乞う為でございました。犬の愛で方もわからぬくらいに愛を知らなかったのですから、まずは、愛してもらおうと考えたのです。それは言うまでもなく駄目で承知の行動に他ならず、もはや諦観ばかりしか抱いてはおりませんでした。グスタフの瞳の美しさが日増しにギチギチギチ私を締め付けるばかりでしたので、何もせずにはいられなくなっていたくらいには追い詰められておりました。ですから、彼の声で、救われた心地が満ちました。

愛情とは「そういう」概念である、と勝手に一人合点をしたのです。すると私は、どこもくすぐったくないのに笑っていたことを自覚するに至りました。わからなかったことが理解へ近づいたことが、或いは愛情をもたらされたというその行為自体が、堪らなく嬉しかったのでしよう。

「愛を私に教えてください」
ですから、そう叫ばずにはいられませんでした。